

〔成果情報名〕 3種アザミウマ類のイチゴ果実に対する加害能力の違い

〔要約〕 イチゴ果実に被害を与えるアザミウマ類の加害能力はヒラズハナアザミウマとチャノキイロアザミウマ C 系統が高く、ネギアザミウマは低い。

〔キーワード〕 イチゴ、アザミウマ類、被害解析、発生生態

〔担当〕 長崎県農林技術開発センター・環境研究部門・病害虫研究室

〔連絡先〕 （代表）0957-26-3330

〔区分〕 施設野菜

〔分類〕 普及

〔作成年度〕 2024 年度

〔背景・ねらい〕

イチゴに寄生するアザミウマ類は、果実を加害し商品価値を低下させるため経営的に損害が大きい。イチゴを加害するアザミウマ類は、ヒラズハナアザミウマ、ネギアザミウマに加え、県内ではチャノキイロアザミウマ C 系統等が発生している（永石ら，2022）。これらアザミウマ類によるイチゴに対する加害性については詳しい報告が少なく実態が分かっていない。

そこで、イチゴ加害性のアザミウマ類による果実への加害能力を比較し、アザミウマ防除対策の参考とする。

〔成果の内容・特徴〕

1. イチゴ果実への加害程度は、アザミウマ類の種によって異なる（図1、写真1）。
2. アザミウマ類によるイチゴへの加害能力は、ヒラズハナアザミウマとチャノキイロアザミウマ C 系統は同程度に高く、ネギアザミウマは低い（図1、写真）。
3. ネギアザミウマの加害による被害は、成虫 15 頭／花で現れる（図2）。

〔成果の活用面・留意点〕

1. ハウス内に発生しているアザミウマ類を確認することで、防除の意思決定を行う際の参考となる。
2. 本県の4月下旬以降のハウス内における優占種はヒラズハナアザミウマである（成果情報，2016）。
3. ヒラズハナアザミウマが優占している圃場の要防除水準は寄生花率 10%程度であるとされるが（春山ら，2013）、ネギアザミウマが優占している圃場ではこれより高くなると考えられる。
4. チャノキイロアザミウマ C 系統は、加害により葉や葉柄、果梗枝、果実を黒褐変させる。

[具体的データ]

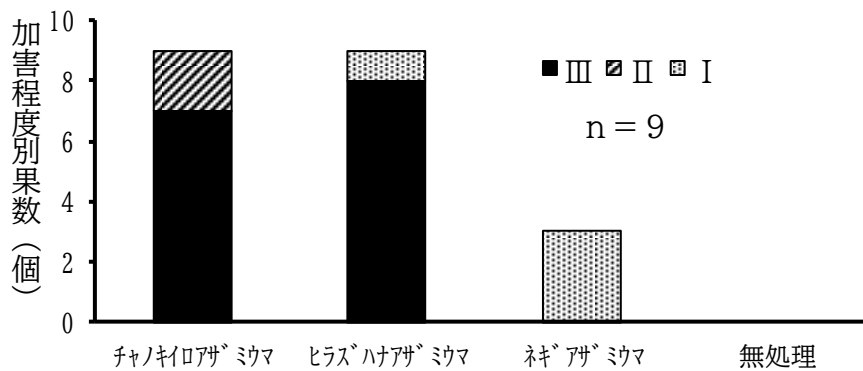


図1 各アザミウマによるイチゴ加害程度別果数

<被害基準> 果実表面の加害面積

III: 30% >、II: 10% >、I: 10~0%

注1) 試験方法: 開花直後の1花をメッシュ袋で覆うと同時に、アザミウマ雌成虫3頭を袋の中に放虫

2) 試験規模: 1区1果 3反復

3) 試験回数: 3回

(1回目: 2023.11/6-11/29、2回目: 2023.11/15-12/13、3回目: 2023.12/15-2024.1/10)

4) 数値は9果あたり加害果数(3反復×3回)

5) 品種: ゆめのか

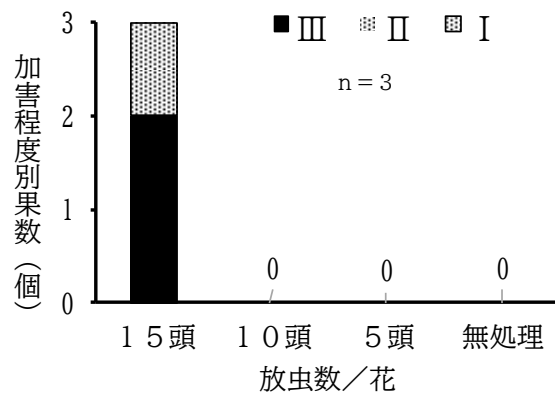


図2 ネギアザミウマ放虫数別イチゴ加害程度別果数

<加害基準> 図1に同じ

注1) 試験時期: 2024.2/16-3/7

2) 品種: ゆめのか

3) 各区1果 3反復

4) 数値は3果あたり加害果数



写真1 各アザミウマによるイチゴへの加害 (アザミウマの名称は略称)

[その他]

研究課題名: 農林業生産現場への緊急技術支援プロジェクト

予算区分: 県単 (経常研究)

研究期間: 2024 年度

研究担当者: 高田裕司